

長岡技大における TOEFL-ITP 実施報告

古谷千里*, William Flaman*

Historical Review of the Implementation of
TOEFL-ITP at Nagaoka University of Technology

Chisato FURUYA, WILLIAM FLAMAN

TOEFL-ITP has been used at Nagaoka University of Technology in the 1990s as a measure of English language ability for the third year students. It has been used as a standard mainly to evaluate students for admission to the graduate school. The scores of the students are so low that we should examine the validity of the test as well as its reliability. In this paper, we reevaluate the application of the test at Nagaoka University, reviewing its background, aim, learning support programs, budget, and test results, as well as the discussions and cooperation between representatives from the English language teaching staff and each of the engineering faculties.

Key Words: TESOL, TOEFL-ITP, engineering

はじめに

TOEFL-ITP¹を長岡技術科学大学の学部3年生に導入してから3年になる。その導入経過と実施状況を報告するとともにプロジェクトの評価を行ない、今後のよりよい対策を講じる資料としたい。

1. TOEFL-ITP 導入の背景

長岡技術科学大学では、学部3学年次の学業成績は4年次の研究室配属、実務訓練、大学院進学等の判定資料として重要な要因となっている。英語の成績

原稿受付：平成9年5月29日

*長岡技術科学大学語学センター

はこれらの判断基準の一つに含まれている²。しかし、英語科目の成績は受講クラスによって評価基準が異なり、大学院入学判定資料としては不適切である。そのため、TOEFL-ITPを導入する以前は、工学系の教官が各系別々に英語の試験問題を作成し入学判定資料を作成していた。

また、科学技術の急速な国際化に伴い、工学専攻の大学院生に求められる英語力が高まっていく一方で、長岡技大生の英語力の低さが問題の一つになっていた。国際的に通用する英語力の養成を目標に、英語力をより普遍的な尺度で測定する方策として、1990年に入ってからTOEFL-ITP等の英語力テストの導入がいくつかの系で検討され始めた。最初に実施に踏み切ったのは機械系である。1990年(平成2年)12月に学部3年生130名を対象にPre-TOEFL³が行われた。その経緯については「機械系のTOEFL導入の経緯」⁴を参照されたい。その後、電気系、生物系等が試行し、1993年11月までには建設系を除く4つの系—機械系、電気系、化学系、生物系—で個別に実施されるようになった⁵。

学内のこのような動きに対して英語科目担当教官は「TOEFLガイダンス」⁶を開催し、テストの特徴や学習方法等についての講義を行ない学習支援を行なった。当時、語学センターの英語科目担当教官は大学院入学試験には関わっていなかったが英語教育の問題としてこれに加わり、国際的な基準で英語力を測るテストの検討を全学的に模索し始めた。この時点で建設系も参加し、英語テストは全学の問題として1993年度の語学センター運営委員会で検討され以下のような合意を得た。

英語力テスト導入の目的は主に次の3項目である。1) 大学院入学判定資料として英語力に関する基準の明確な数値を得ること。2) 語学センターは1)のデータをもとに学生の英語力を客観的に把握すること。3) 学生に英語学習の具体的な目標を持たせること。

1993年当時、日本で受験可能な英語検定試験は約40種があり、その中から上記の3つの目標に適い、さらに実施に伴う下記のような条件を満たすテストを選択した。(a)テスト内容が一般的な英語力を測るもの。(b)英語のレベルが本学の学生の英語力を測る尺度として適切なもの。(c)テスト結果が合否ではなく点数で評価されるもの。(d)より多くの学生の英語力との比較ができるもの。(e)試験の日時と場所が受験困難でないもの。(f)経済的に負担の軽いもの。(g)問題形式やテスト内容が馴れ親しんでいるもので自己学習しやすいもの

検討の結果これらすべての条件を満たすものはなかったが、上記(a)～(f)の条件を満たすものとしてTOEFL-ITPが選択された。特に英語力の低い受験者

のために編纂されたLevel 2（通称Pre-TOEFL）を利用することになった。条件(g)については英語教官がオリエンテーションや演習を行なうことによって補うこととした。

試験の実施方法、経費、試験結果の利用方法等については以下のような方針を立てた。これは1994年の方針であるが、その後、部分的な変更が加えられている。1) Pre-TOEFLを学部3年生（大学院進学希望者のみ）を対象として全系合同で年1回行う。2) 成績を大学院入学判定資料としてどのように利用するかについては各系の裁量にまかせる。3) 語学センターでは成績を英語力の実態把握の資料として利用する。4) 経費は各系の教官が負担する。5) 実施に伴う事務的作業は語学センターと各系のTOEFL-ITP担当者が協同で行う。6) 語学センターはオリエンテーション、ワークショップ、テープライブラリーの充実、等の学習支援を行なう。

2. 実施の経緯

TOEFL-ITPの合同テストは1994年度以来3回実施された。実施状況は以下の通りである。その間、実施作業の簡便化、教育内容や学習環境の充実等が行なわれた。

1994年度

1) それまで各系で別々に行なってきた試験の実施にかかわる作業を一本化し労力の無駄を省き、テスト問題を共同購入することによって経費の節約を行なった。2) 工学部の教官と英語教官とが協同作業し、役割分担を明らかにした。3) 英語教官はオリエンテーションとワークショップ等の教育支援を行なった。高い出席率を得た。4) 機械系は学生用に教材を購入して貸出し、語学センターはテープライブラリーにTOEFL教材を備え自学自習の環境を整備した。5) 大学独自の実施マニュアルを作成した。機械系と電気系では既に詳しいマニュアルが作成されていた。6) テープレコーダーを語学センター経費で追加購入し、リスニングテストを7会場において同時に行なえるようにした。

1995年度

1) オリエンテーションとワークショップに加え、試験模擬テストを行ない実践力を養成するようにした。2) 新学期のオリエンテーションや、大学のニューズレター等で学生への周知に努め、学習意識を高めるようにした⁷⁾。3) 大学院へ進学しない学生を含む3年生全員が受験し、英語力調査としてより網羅的にデータを得るようにした。

1996年度

1) 高得点者がより正確な評価を得られるようにPre-TOEFLに加えTOEFL-ITP Level 1を併用した。10名が受験した。2) 選択必修科目(31B, 及び32B)にTOEFLリスニング対策の授業を開設した。

3. 実施状況

3. 1 テストの実施状況

各年度のTOEFL-ITPの実施日と受験者数は表1の通りである。テスト日は11月末、時間は学部3年生対象の英語の選択必修クラスの時間帯(火曜日5時間目)を当てた。Level 2は各系の指定する教室で行ない、Level 1(1996年度以降)は語学センターLL1で行なった。

表1: TOEFL-ITPの実施日と受験者数

年度	テスト日	受験者数(名)
1994	11. 1	447
1995	11.21	422
1996	11.19	511 (内 Level 1-10名)

3. 2 学習支援プログラム

毎年学部3年生を対象として、ガイダンス、ワークショップ、模擬試験等の学習支援プログラムを行なった。受講は自由であり単位に関係のない特別講座である上に、4:20-5:50 p.m.あるいは、6:00p.m.以降という遅い時間帯に開講したにも拘わらず出席率は高かった⁸。

4. 成績結果と評価

4. 1 成績結果

表2, 3, 4に各年度の受験者数, 平均点, 400点以上取得者の数, 500点満点取得者数(1994, 1995年度), 及び500点以上の取得者数(1996年度)の数を表わした。

表 2 : 1994年度成績結果

系	受験者数 (人)	平均点(点)	400点以上 (人)	400点以上 取得者の率 (%)	満点(500点) 取得者数 (人)
電 気	139	401	57	41%	4*
機 械	140	386	34	24%	0
建 設	63	378	12	19%	1*
生 物	57	388	17	30%	0
化 学	48	382	14	29%	0
全課程	447	387	134	30%	5*

*留学生

表 3 : 1995年度成績結果

系	受験者数 (人)	平均点(点)	400点以上 (人)	400点以上 取得者の率 (%)	満点(500点) 取得者数 (人)
電 気	130	385.74	36	27.7%	4*
機 械	128	381.84	42	32.8%	2 (1*)
建 設	60	365.82	2	3.3%	0
生 物	49	380.14	8	16.3%	0
化 学	55	373.16	12	21.8%	0
全課程	422	379.44	100	23.7%	6 (内 5*)

*留学生

参照：ヒストグラム 1

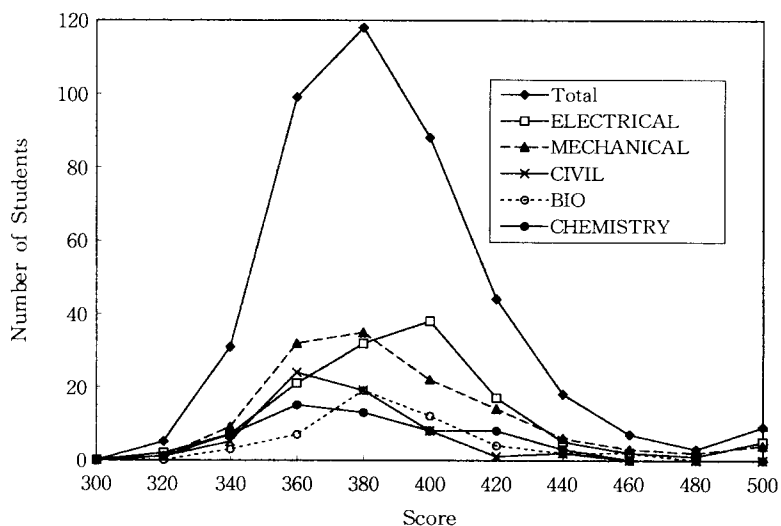


図1：TOEFL-ITPの成績 1995

表4：1996年度成績結果

系	受験者数 (人)	平均点(点)	400点以上 (人)	400点以上 取得者の率 (%)	500点以上 取得者数 (人)
電 気	149	388.43	52	34.9%	3*
機 械	132	383.78	34	25.8%	3*
建 設	56	376.11	9	16%	2*
環 境	53	377.57	16	30.1%	2 (1*)
生 物	52	377.10	10	19.2%	0
化 学	59	375.68	14	23.7%	0
全課程	511	379.78	135	26.4%	10(内9*)

*留学生

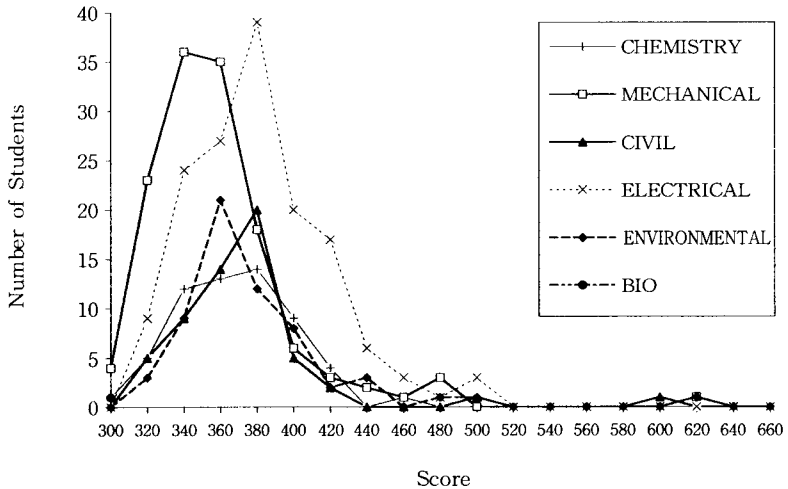


図 2 : TOEFL-ITPの成績 1996

成績結果から次のことが明らかになった。1) 各系の平均点が400点に満たないこと。2) 400点以上の点数取得者は受験者全体の25%であり、学生の大
 半(75%)は400点以下であること。3) 高得点者の90%が留学生⁹であること。

4. 2 成績の推移

各年度の平均点の推移を見るとこの3年間で下降傾向にある。また、400点
 以上の得点者数の推移も下降傾向にある。さらに、500点またはそれ以上の90
 %が留学生であり、彼等の点数をデータから外すならば日本人学生の平均値は
 一層低くなる。

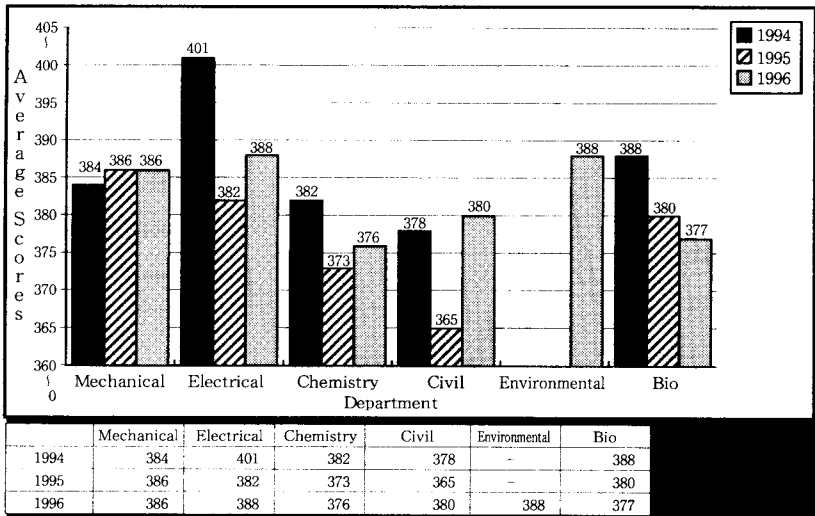


図3：系別のTOEFL平均値の推移

4. 3 成績評価

TOEFL-ITPの平均点が400点以下であり、その平均値は年々下降傾向にあることが明らかになった。TOEFL400以下ということは英語力としてどのような実態を示しているのだろうか？

4. 3. 1 本学の平均値について

本学の過去3年間のTOEFL-ITP平均値は、1994年度の電気系の401点以外、400を越えることはなかった。TOEFLの点数が400を下回るということは何を意味するのか？ 本学の3年間の平均点を382と概算してその他のTOEFLの得点と比較してみよう。比較の対象は、1) 日本人受験者の平均値¹⁰、2) 英語圏における短大入学の目安¹¹、3) 英語圏における大学入学の目安¹¹、4) 英語圏における大学院入学の目安¹¹等である。

長岡技大におけるTOEFL-ITP実施報告

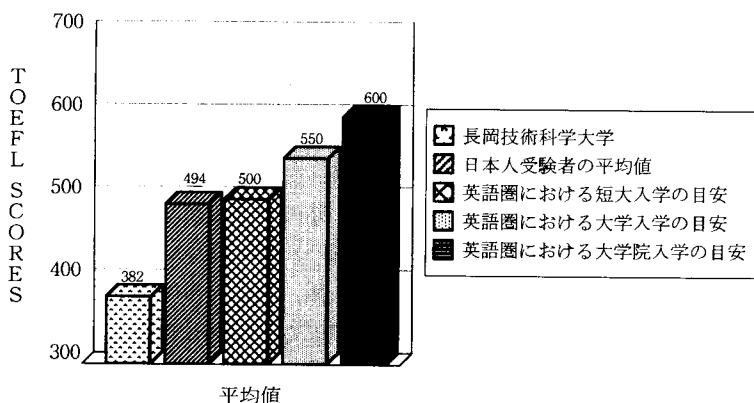


図4：本学のTOEFLの平均値と他との比較

本学の英語力の平均値は日本人のそれより100以上低く、英語圏の大学進学などの目安からもはるかに低い。「英語力が不足している」という教育者側の印象を客観的に証明するという残念な結果が明らかにされた。

また、次のデータから400点以下では英語圏での大学学部への入学の可能性はほぼゼロである。ましてや、大学院レベルの入学は問題外である。

表5：How TOEFL scores are used at the admissions

Minimum TOEFL Score Required for College and University Admissions				
TOEFL SCORE Range	Undergraduate Admissions N=322		Graduate Admissions N=330	
	Frequency	Perecent	Frequency	Perecent
600-650	12	3%	71	22%
550-597	156	48%	218	66%
500-547	145	45%	41	12%
450-497	11	3%	—	—
400-447	2	1%	—	—

Data Source: TOEFL Test and Score Data Summary 1995-96 Edition, Educational Testing Service, 1995

本学ではTOEFL-ITPを大学院進学判定資料として利用しているが、国際的な基準から見ると、400点以下では英語による大学院レベルの研究活動は極めて困難である。本学では教育と研究が日本語で行なわれており、英語圏での条件を判断の基準とすることは妥当ではない。しかし、実際には大学院レベルの教育・研究において英語による論文の理解や執筆、さらに国際会議での発表等の必要性がある。学生の英語力の現実と期待される英語力との間にどれほど大きなギャップがあるかを正しく認識しなければならない。

このような大きなギャップを埋めるには一体、どれくらいの英語学習量が必要であろうか？ TOEFLと実際の英語運用能力との関係に詳しいA.J.Gillet氏は次のように指摘している。「TOEFL450以下では大学教育を受ける前に1セメスタ（約3～4ヶ月）または一年間の集中的な学習が必要。400以下は問題外だ。単語を集めて文は作れてもレポートは書けない。300以下ではパラグラフ1つ書けない。1年以上の集中的な学習が必要だ」¹²

5. プロジェクト評価と今後の課題

TOEFLは本学の学生には難し過ぎた。授業内外からの教育支援にも拘わらず成績は好転しなかった。毎年450人前後の学生に100万円前後の経費を使い、工学部の教官と英語教官が時間と労力を費やし、学生には大きなプレッシャーをかけたがよい結果は得られなかった。今、ここで、TOEFL-ITPを導入したこと自体について評価し直し、今後もこのテストを利用するかについて検討する必要がある。

5. 1 目標の達成度

本プロジェクトの当初の目標をどの程度達成したかについて再検討してみると、1) 基準の明確な数値が得られた。2) 学生の英語力を客観的に把握できた。しかし、3) 学生に英語学習の具体的な目標を持たせることができたかどうかは疑問である。学生へのアンケート調査では、このテストのために積極的に学習した学生は僅か2%であった¹³。

また、テスト問題の選択は適切であったかどうかについては、導入時の条件(a)～(g)のうち次の項目には問題がなかった。c) テスト結果を点数で評価した。d) より多くの学生の英語力との比較ができた。e) 試験の実行において便利であった。f) 費用が比較的安価であった。

しかし、次の項目においては問題が残った。a) 一般的な英語力(GE)を測

定するものであったか？ b) 英語問題のレベルが本学の学生の英語力を測る尺度として適切であったか？ g) 自己学習しやすい形式と内容であったか？

TOEFLの英語はGEとして一般には分類されているが、その内容は米国の大学生生活と大学生に期待されるアメリカ人としての一般常識に関するものである。アメリカ文化に触れたことのない学生には、言語ばかりではなく文化的知識の壁も高かったようだ。次に、学生の英語力とテストのレベルは適切だったとは言えない。特に学力が年々低下しており、両者のレベル差は大きくなるばかりであった。これらが高いハードルとなって、ガイダンスや模擬テスト等の教育支援を行なっても、それらは自学自習に繋がらなかったようである。

5. 2 プロジェクトの成果

全学的に学部学生の英語力を客観的に評価する試みは残念ながら疑問を残すことになったが、以下のような成果も得られた。

- (1) 学部3年生の英語力の客観的数値が得られた。特にTOEFLという世界共通の尺度を利用することによって本学の学生の英語力が日本や世界の中でどのような位置にあるかを把握できた。
- (2) これまでの3年間の英語力の推移が把握できた。
- (3) リスニング力や異文化に関する知識を含めたオールラウンドな英語力の必要性を学生も教師も認識した。但し、工学の教育と研究に必要とされる読解力と書く能力の改善については、本テストプロジェクトでは特に進展は得られなかった。
- (4) TOEFL-ITPの成績が、大学院進学判定基準の他に、その他の英語力の判定基準として利用されるようになった。例えばサセックス大学への学生派遣プログラムではその選考資料として、また、機械系の英語講座のクラス分けの判定基準としても利用されている。
- (5) 工学部の教官と語学センター所属の英語教官が協同作業することによって、本学の英語教育への相互理解をもつことができた。

5. 3 問題点と今後の課題

本プロジェクトには以下の4つの課題が残った。1) TOEFL-ITPは本学にとって最適なテストか、2) テストの利用方法は適切であったか、3) 学生に学習目標を与えたか、4) 学習意欲を沸かせるテストシステムであったか。

最大の問題はTOEFL-ITPが本学の学生の英語力を測るための最適なテスト

であったかどうかということである。成績結果から、テストのレベルは本学の学生の英語力を測るには高すぎた。特に400以下の下位グループの英語力をより細かに評価するテストが必要である。また、特定の文化に偏らず国際人としての英語力を問うテストを採用することが望ましい。

次にテストの利用方法が適切であったかどうかを再検討しなければならない。TOEFL-ITPを導入する日本の大学や教育機関が増えているが¹⁴、事例研究の中でテストを複数回受けることによって成績が上がる事が報告されている¹⁵。最初の得点が400点以下であっても数回の受験経験の後に500点を越えることが可能であり、また、それは一般的な傾向として言えるようだ¹。

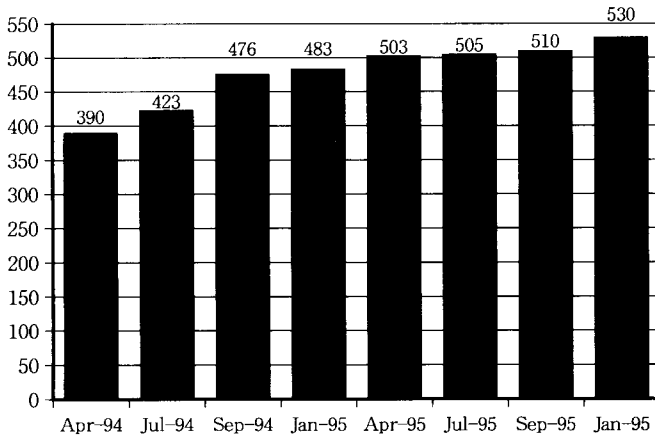


図5：一人の学生の平均的な成績の伸び

テストへの慣れやテスト技術を身につけることによって得点が伸びる。このような性格を持つテストを本学のように1-2回限りの利用で英語力を測る利用方法は適切とは言えない。TOEFLは本来、合格・不合格を判定するテストではなく、複数回挑戦出来るように編纂されているテストであるから、その利用方法についても再検討されなければならない。

第三の問題として、このテストを課すことによって学生に学習目標を与えられたかどうかについて検討してみたい。英語教官のなかには彼等の英語力とテストのレベルに大きな差があるため学習目標を与えるどころか、むしろ脅威を与えているのではないかという危惧があった。しかし、学生に対するアンケー

ト調査では半数以上の学生はこのテストから学習目標の指針も、プレッシャーのどちらも受けていない¹⁶。

このテストが学生の学習意欲を喚起するためにあまり効果的でなかったとすれば、テストの利用システムに何らかの問題があったのではないか。その原因としては次の3項目が考えられる。1) テストのレベルが高すぎるため学習を放棄した。2) テストの結果が大学院進学必要条件として厳重に使用されていないため真剣にテスト準備をしなかった。3) 学部3年生では英語の必要性が強く認識されないため、成績が悪くとも気にしなかった。

英語力が低すぎる場合学習を放棄する傾向が見られる。機械系の調査によると、1回目の点数が385点以下の者は2回目のテストにおいて成績が悪化した者と向上した者がほぼ同数であった。一方、385点以上の場合、2回目のテストにおいて成績が向上した者の数が多かった¹⁷。

一般的にこのテストの成績が悪くとも最終的には大学院への進学が許されてきたため、学生の間には「試験を受けさえすればよい」とう安易な風潮が見られる。大学院入学選考方法の中にこの英語テストをもっと厳密な判定尺度として用いて、テストを一つの教育手段として利用したいものである。

試験の時期についても再検討しなければならない。このテストの成績を大学院進学、4年次の実務訓練派遣、等の判定基準とするため、学部3年の教育課程の終了時にテストを行なっている。しかし、本学の学生が英語の必要性を強く認識する時期は、4年次の実務訓練の時であり、また、大学院進学後に研究論文を読み書きする必要が生じる時である。テストを学習意欲に効果的に繋げるにはテストの時期についても慎重に検討することが望まれる。

結語

本プロジェクトにおいて早急に再検討を要する項目として以下の課題があげられる。1) TOEFLの得点が400以下のグループの英語力をより適切に評価するテストの選択、2) テストの時期や回数等のテスト施行方法の再検討、3) 教育効果をあげるテストシステムの再検討。これらの課題に対して改善策を見出し、より適切な評価システムを構築することが望まれる。

注

1. TOEFL-ITP: Test of English as a Foreign Language - Institutional Testing Program. 過去に使用された正規のTOEFLの問題を教育機関で利用出来るように編纂したもの。正規のTOEFLの成績としては利用できない。
2. 1997年度大学院工学研究科修士課程入学選抜試験の学内選抜推薦基準においては、7課程のうち5つの課程が英語力を選抜基準としてあげている。また、3課程ではTOEFL-ITPの成績を、2課程が英検の成績を判定基準として利用することを明記している。
3. TOEFL-ITPにはLevel 1 とLevel 2 がある。Level 2 はPre-TOEFLとも呼ばれている。Level 1 とLevel 2 の違いは以下の通り。

種 類	満 点	問 題 数	試験時間
Level 1	677	150	105分
Level 2 (Pre-TOEFL)	500	95	70分
正規TOEFL	677	140	115分

4. 矢鍋重夫「機械系のTOEFL導入の経緯」『報告書(機械系) 英語教室について』長岡技術科学大学, 1992, pp.3-4
5. 1993年度当時のTOEFL-ITP実施状況

	実施時期	対象学年(学生数)	経費負担
電 気 系	1993. 9	3 年(118)	教官
	1994. 4	399点以下の者	学生
機 械 系	1993. 9	3 年(127)	教官
	1994. 4	399点以下の者	学生
材 料 系	1994. 1	3 年(54)	教官
生 物 系	1993.11	3 年(49)	教官
	1994. 2	399点以下の者	学生
建 設 系	行わず		

年に1回行なう系と2回行なう系とがあった。399点以下の者に対しては約半年後に2回目のテストを行なった。この傾向は1997年現在も続いている。

6. 1993年に開催されたガイダンスは以下の通りである。
『英語特別講習 Pre-TOEFLガイダンス』実施要領
- | | |
|----|---------------------------|
| 日時 | 1993年6月30日(水) |
| | 第1回目 2:40p.m.-4:10p.m. |
| | 第2回目 4:20p.m.-5:50p.m. |
| 場所 | A講義室 |
| 対象 | 全系3-4年生(参加者 計398名) |
| | 各系合同とし学生は都合のよい時間帯に参加する |
| 内容 | 1. Pre-TOEFLテストとはどんなテストか。 |
| | 2. 問題形式と回答方法についての解説および演習。 |
| | 3. 自己学習の方法。 |
| | 4. 参考書および教材について。 |

7. Pre-TOEFLに関する広報活動

- (1) 白石万紀子, 古谷千里「本学のTOEFLの結果及びその利用の妥当性」『報告書(機械系) 英語教室について』長岡技術科学大学, 1992.9.21, pp.5-10
- (2) 古谷千里「TOEFLガイダンス」について」『報告書 平成5年度における新しい試み—オーラルコミュニケーションの導入を中心に—』長岡技術科学大学, 1994.10.1, pp.8-9
- (3) 古谷千里「学内統一テストPre-TOEFL報告」VOS, No.76, Apr.1995
- (4) 近松明彦「Step by Step 英語教育の新しい試み」VOS, No.77, July 1995
- (5) 古谷千里「トータル: TOEFL ITP '96」VOS, No.82, JUL.1996
- (6) 「使える英語を目指しTOEFL, TOEIC, 導入大学・短大が増加—長岡技科大3年生の必修に」新潟日報1996年9月29日

8. 各年に行なわれた教育支援プログラムと出席状況は以下の通りである。

学習支援プログラムと受講者数—1994年度

	月 日	時 間	場 所	参加者数 (約)
ガイダンス	5/27 (金)	5 時限目	B 講	220
ガイダンス	6/ 1 (水)	5 時限目	A 講	220
ワークショップ Listening	6/15 (水)	5 時限目	A 講	230
Listening	6/20 (月)	5 時限目	A 講	200
Grammar	6/22 (水)	5 時限目	A 講	100
Grammar	6/27 (月)	5 時限目	A 講	100
Reading	6/29 (水)	5 時限目	A 講	120
Reading	7/ 4 (月)	5 時限目	A 講	75

学習支援プログラムと受講者数—1995年度

	月 日	時 間	場 所	参加者数 (約)
ガイダンス	4/25 (火)	5 時限目	A + B 講	340
模擬試験 (第1回)	4/26 (水)	5 時限目	A + B 講	290
模擬試験 (第2回)	9/13 (水)	5 時限目	A + B 講	267

学習支援プログラムと受講者数—1996年度

	月 日	時 間	場 所	参加者数 (約)
ガイダンス	6/18 (火)	5 時限目	A + B 講	500
模擬試験 (第1回)	6/9 (水)	6-7:30p.m.	A + B 講	379
模擬試験 (第2回)	11/6 (水)	6-7:30p.m.	A + B 講	250

9. 高得点を取った留学生の出身国は, マレーシア, フィリピン, アルゼンチン等である。
10. TOEFL Test and Score Data Summary 1995-96 Edition, Educational Testing Service, 1995
11. ETS: Educational Testing Service (TOEFL事業の母体) 発表のデータ。これらの数値は正規のTOEFLデータによるものであって, TOEFL-ITPのデータではない。TOEFL-ITPのデータは公表されていない。

12. 引用したコメントはメーリングリストTESL-L上で行なわれた議論の集約的な意見である。TESL-Lは世界92ヶ国の英語教育専門家10,005人(12/3/95現在)が参加している英語教育に関するメーリングリストである。

Date: Thu. 27 Mar. 1997 10:14:31 EST

From Andy Gillet <A.J. Gillet@HERST.AC.UK>

Subject: Re:TOEFL550

What do scores below 450 mean?

A student who got 450 would have a difficult time and would have a long way to go. In general they would need between one semester and one year of intensive English before starting academic classes. One of two institutions would allow students to take some classes. The score below 400 seem to be quite meaningless. Someone with 400 would be able to put sentences together, but would not be able to write an essay. Someone with 300 can't generate a decent paragraph and would need a year or more of intensive English.

13. 詳しい報告は以下の別稿で行なう。

W. Flaman, C. FURUYA, (1997) Perspective and Evaluation of the Institutional Testing Program (ITP) for TOEFL (Test of English as a Foreign Language) at a National University of Technology, 『長岡技術科学大学言語・人文科学論集第11号』1997, p.103

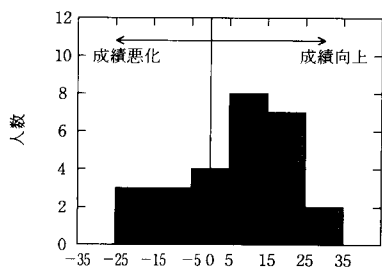
14. 1996年5月現在のTOEFL ITP利用団体数は455団体・部署。「TOEFL ITP: ユーザーアンケートの結果」『TOEFL ITPセミナー資料』1996.7.7 国際教育交換協議会日本代表部TOEFL事業部

15. 沖津三恵子「洗足学園短期大学の事例発表」『TOEFL ITPセミナー資料』1996.7.7

16. W. Flaman, C. FURUYA, (1997) Perspective and Evaluation of the Institutional Testing Program (ITP) for TOEFL (Test of English as a Foreign Language) at a National University of Technology, 『長岡技術科学大学言語・人文科学論集第11号』1997, pp.105-106

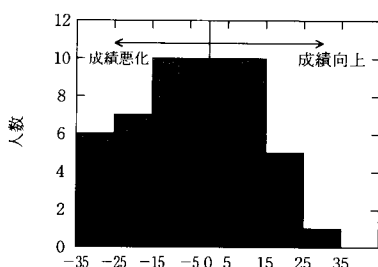
17. 得点の伸びについての比較図—機械系の場合 (1996年度)

385点以上の学生の2回目のTOEFLの得点の伸び



(2回目のTOEFL得点) - (1回目のTOEFL得点)

385点以下の学生の2回目のTOEFLの得点の伸び



(2回目のTOEFL得点) - (1回目のTOEFL得点)

謝辞

試験の実施にあたって特に御尽力下さいました元語学センターの近松明彦氏(現大阪学院大学講師)と各系のTOEFL担当教官の方々に感謝申し上げます。